

# 平安和文会話文における連体法、準体法、終止法の比較分析

土岐 留美江

日本語教育講座

## The Analysis of Adnominal Clause, Quasi-nominal Phrases and Final-Attributive in Heian Japanese Conversational Texts

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### Abstract

This paper examines lexical-semantic properties of Heian Japanese verbs, adjectives and auxiliaries found in colloquial text, with special reference to their usages in adnominal clauses, quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) and final-attributives (sentences ending in adnominal form).

The specific findings are as follows:

- (a) Verbs of motion/change are most frequent in adnominal clauses, while verbs of emotion/thought/perception are most frequent in final-attributives. The ratio of the two types found in quasi-nominal phrases is the same.
- (b) All adjective types (emotional, attributive and in-between types) are found in adnominal clauses and quasi-nominal phrases, while only emotional adjectives (often with negative connotation) appear in final-attributives. Comparison of the ratio of adjectives to verbs appearing in the three types of construction shows that the quasi-nominal phrase has intermediate characteristics between the other two constructions.
- (c) No particular correlations are found between the frequency and the lexical meanings of auxiliaries (conjectural or past) in adnominal clauses and quasi-nominal phrases, while emotion/thought auxiliaries, past/perfective auxiliaries, conjectural auxiliaries, negative auxiliaries, assertive auxiliaries are most frequent, in descending order, in final-attributives. But past auxiliary verb “ki” is more frequent than negative auxiliary verb “zu” in both quasi-nominal phrases and final-attributives.

The three findings above reveal that the quasi-nominal phrase has intermediate characteristics between the adnominal clause and the final-attributive form.

### 1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて山内（2003）を代表とする多くの先行研究が

ある。

また③の準体用法については、断定の助動詞の活用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同（1987）、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同（2006）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がり、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存

在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p. 141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太（1996）では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴をデータに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。

土岐（2005）では、連体形終止法を終止形終止法や「ぞ」、「なむ」共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合と比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また土岐（2008）では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐（2009）、助詞「が」が後接するケースについては土岐（2010）、助詞「を」が後接するケースについては土岐（2011）、助詞「に」が後接するケースについては土岐（2012）、係助詞「は」が後接するケースについては土岐（2013）、係助詞「も」が後接するケースについては土岐（2014）、係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」が後接するケースについては土岐（2015）、その他の助詞が後接するケースについては土岐（2016）で考察を行った。これらの研究により、三つの用法の基本的なデータはすべて出そろったことになる。これらの結果を踏まえ、本稿では、平安和文会話文における連体形による三つの用法相互の関係を考察する。

## 2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは『源氏物語』（岩波新日本古典大系本）である。一方、土岐（2005）で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、『源氏物語』のみを対象とした準体法および連体法の考察とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語]：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日

本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

## 3. 分析対象形式

連体形終止については、地の文と会話文とで用法が異なることが先行研究により指摘されている。比較のため連体法を分析した土岐（2008）や、準体法を分析した土岐（2009）、土岐（2010）、土岐（2011）、土岐（2012）、土岐（2013）、土岐（2014）、土岐（2015）、（2016）も同様に会話文中のデータに限定して分析を行った。本稿での考察も会話文中のデータに限定する。

なお「～給ふ」、「～侍り」、「(ラ)ル」、「(サ)スなどの待遇表現の補助動詞や助動詞が後接する場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞の有無による相違については、今後吟味していく必要がある。

## 4. 分析

### 4.1. 助動詞を含まない動詞句

助動詞を含まない動詞連体形連体法、準体法、終止法の各用例について、終止形・連体形異形の活用語と形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とを合計し、動詞の意味タイプ別に分類して次の表1に示す。

表中、「連体」は連体法、「準」は準体法、「終止」は「終止法」、「動」は動作・変化動詞、「存」は存在詞、「感」は感情・思考・知覚動詞を表す。また、「こ」は助詞「こそ」、「な」は助詞「なむ」、「他」は助詞「より」「まで」「など」「と」「の」「から」「しも」「がごと」「だに」「とも」「のみ」「さへ」の合計数を表す。

最左端の連体法と最右端の終止法の間で、準体法は無助詞が最も感情・思考・知覚動詞の比率が低く、接続助詞としての用法を持つ助詞「を」と「に」が最も動作・変化動詞の比率が低くなっている。

次に、以下に準体法の各助詞を合計した数値を用いて、終止法、連体法との比較を示す。

助詞相互の相違点を除いても、用法ごとの動詞意味タイプによる分布には、連体法から準体法を通して終止法へとつながる連続性が見られると言えよう。

ただ、この調査結果から示唆される傾向としては、従来の先行研究で述べられてきた、「準体句の直接表出」が連体形終止法の起源である（あるいは共時的に見た場合の原理的本質である）という理解とはやや異なる見解が導き出されるように思う。

データによる述語動詞の意味タイプ別分布結果を検討する限り、準体句の用例は、接続助詞的用法を持つ

助詞「を」後接の準体法と助詞「に」後接の準体法の用例を介して、通常の連体節連体法や助詞「は」「も」などが後接する典型的準体法から、連体形終止法へと連続的に分布している様子が伺える。

表1 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体	準無	準が	準は	準も	準こ	準な	準ぞ	準他	準を	準に	終止
動	731	16	7	30	39	16	7	1	14	45	31	19
存	155	4	4	8	4	0	1	0	1	21	7	6
感	508	9	7	22	31	14	4	0	11	53	48	37
計	1394	29	18	60	74	30	12	1	26	119	86	62

グラフ1

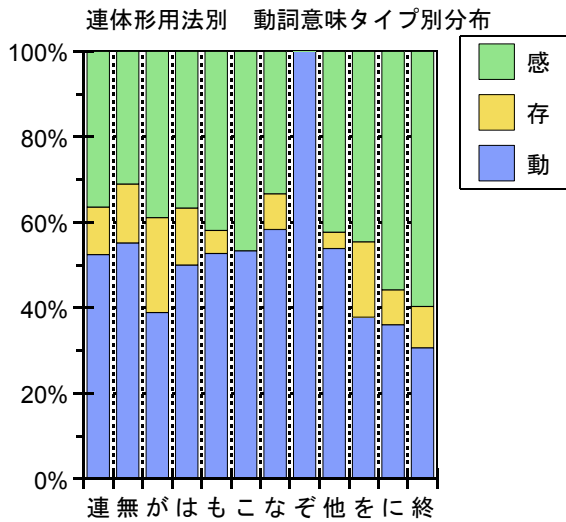
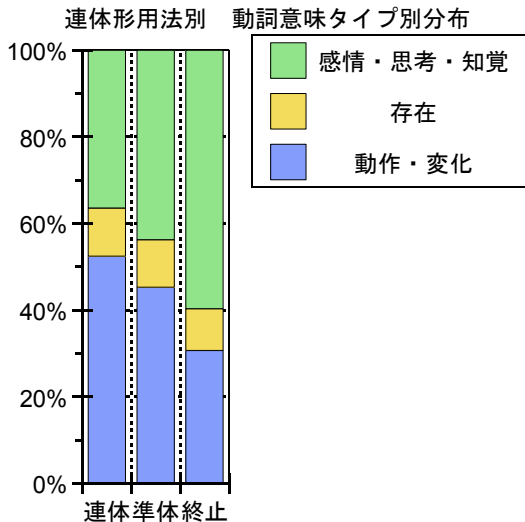


表1' 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体	準体	終止
動作・変化	731	206	19
存在	155	50	6
感情・思考・知覚	508	199	37
計	1394	455	62

グラフ1'



つまり、接続助詞的「を」「に」が後接する用例があることで、句末に位置する場合と類似した構文環境が整い、それが「を」や「に」を伴わない形での文末での準体句の出現（すなわち連体形終止法）を容易にしているのではないかと考えられる。

本稿の分析は、平安時代の和文資料における共時的な考察である。そのような立場からは、連体法、準体法、終止法の連体形による三種の用法の関係はこのように捉えられよう。

更に、以下に終止形終止法と連体形を用いた係り結び終止の分布を土岐（2005）のデータを用いて編集し直し、表2とグラフ2に示す。以下に示す終止とは、終止・連体異形活用語の終止形終止を、同形とは、終止・連体同形活用語の終止形終止を示し、中ゾは文中に現れる通常のゾ係り結びを、末ゾとは文末に助詞ゾが現れる場合を意味する。

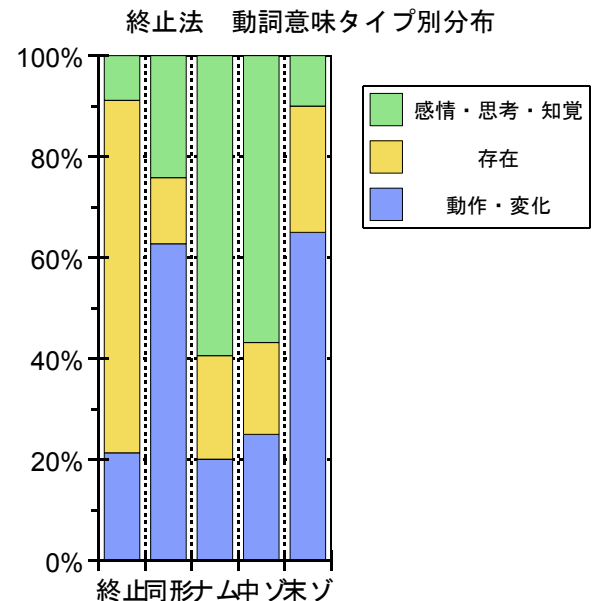
近藤（2000）では、共時的に連体形の諸用法を関係と考えた場合、係り結びの結びの連体形は、理論的には終止法の特殊な形であると位置づけられている。つまり原理的には通常の終止形終止法に見られる特徴は結びの連体形もすべてそなえているはずだという指摘がある。（p. 248～p. 254）

しかし連体形による係り結びは、述語の意味的分布を分析すると、終止形終止よりは連体形終止のほうに

表2 終止法 動詞意味タイプ別分布

	終止	同形	ナム	中ゾ	末ゾ	計
動作・変化	41	192	95	11	13	352
存在	134	40	97	8	5	284
感情・思考・知覚	17	74	281	25	2	399
計	192	306	473	44	20	1035

グラフ2



格段に近い分布を示しており、連体形であるという述語形態による連続性が見てとれる結果となっている。

#### 4.1.1 助動詞を含まない形容詞句

これまで、待遇表現以外の助動詞を伴わない形容詞の準体法の例について、形容詞の意味についてABCの類型を立てて考察した吉田（1995）にならい、A情意的（感情形容詞、評価形容詞）、C属性的（次元形容詞<sup>注</sup>、色彩形容詞、その他）、その中間的なB（否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間形容詞）という三つの類型に分け、更にAの感情・評価形容詞の評価的意味について、プラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付して分析を行ってきた。終止形終止法と連体形終止法の場合の詳細については土岐（2005）で、連体節連体法の場合の詳細については土岐（2008）で述べた。

ここでは、これまで行ってきた分析結果から準体法の総計数を導き出し、その数値をもとに終止形終止法、連体形終止法、連体節連体法と準体法の比較考察を行う。まず、以下の表2に、助動詞を伴わない形容詞のデータを出現数の多い順に示す。Aの感情・評価型形容詞の中で、特に評価的意味を伴わないものについては0とし、文脈によりどちらにもなり得るものについては+-と示す。

表2 準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	53	B	
～がたし	18	A	-
苦し（心苦し）	13	A	-
あやし	11	A	-
深し	8	C	
多し	7	C	
難し	6	A	-
さうへし	6	A	-
悩まし	6	A	-
悪し	4	A	-
賢し	4	A	+
こころやすし	4	A	+
憂し	3	A	-
恐ろし	3	A	-
おぼつかなし	3	A	-
こころほそし	3	A	-
高し	3	C	
つらし	3	A	-
わかへし	3	A	-
あさまし	2	A	-
あやなし	2	A	-
有難し	2	A	+
いとほし	2	A	+

形容詞	総数	類型	評価
うしろめたし	2	A	-
うたてし	2	A	-
うつくし	2	A	+
うらめし	2	A	-
かなし	2	A	+-
ことへし	2	A	-
すくなし	2	C	
つゝまし	2	A	-
はづかし	2	A	+-
便なし	2	A	-
見苦し	2	A	-
めでたし	2	A	+
良し	2	A	+
をかし	2	A	+
あいなし	1	A	-
浅し	1	C	
あなづらはし	1	A	+-
あらへし	1	A	-
痛し	1	A	-
いぶせし	1	A	-
いまめかし	1	A	+-
うしろめたなし	1	A	+
薄し	1	C	
うらやまし	1	A	+
うれし	1	A	+
おこがまし	1	A	-
おさなし	1	A	-
おぼし	1	A	0
おほめかし	1	A	-
重し	1	A	+-
かうばし	1	A	+
かたじけなし	1	A	+
かたはらいたし	1	A	-
かたはらなし	1	A	-
臭し	1	A	-
くちをし	1	A	-
こころもとなし	1	A	-
ことがまし	1	A	-
こめかし	1	A	-
さわがし	1	A	-
しうねし	1	A	-
しるし	1	B	
たいだいし	1	A	-
たのもし	1	A	+
近し	1	C	
つねなし	1	B	
罪得がまし	1	A	-
ところせし	1	B	
長し	1	C	
なげかし	1	A	-
なさけなし	1	A	-

形容詞	総数	類型	評価
なほなほし	1	A	-
亡し	1	B	
にくし	1	A	-
ねたし	1	A	-
のどけし	1	A	+
はかなし	1	A	-
はえなし	1	A	-
ふくつけし	1	A	-
へだてがまし	1	A	-
まばゆし	1	A	+ -
短かし	1	C	
やく(益)なし	1	A	-
やすげなし	1	A	-
やむごとなし	1	A	+
や、まし	1	A	-
よろし	1	A	+
らうたし	1	A	+ -
わづらはし	1	A	-

計255例

次に、以下の表3から表5に、土岐(2008)より改訂した形容詞の終止形終止、連体形終止、連体節での出現データを示す。

表3と表4は、便宜上、終止形終止、連体形終止、ゾ・ナムの結びになっている係り結びの合計数が6例以上見られたもののみを取り上げており、表5については、連体節として6例以上見られたもののみを取り上げているため、すべてを取り上げた表2とは掲載の基準が異なっているが、おおよその傾向は読み取れる。

表3 形容詞・終止形終止総数順

形式	総数	類型	評価
なし	136	B	
良し	28	A	+
あやし	24	A	-
かしこし	20	A	+
いとほし	17	A	+ -
見苦し	16	A	-
苦し(心苦し)	15	A	-
悪し	10	A	-
かたじけなし	9	A	+
遅し	8	B	
かひなし	8	A	-
はづかし	8	A	+ -
やすし(心やすし)	8	A	+
わびし	8	A	-
あぢきなし	7	A	-
いみじ	7	B	
むつかし	7	A	-
かたし	6	A	-

形式	総数	類型	評価
心憂し	6	A	-
~にくし	6	A	-
わづらはし	6	A	-
恐ろし	5	A	-
かなし	3	A	+ -
ありがたし	2	A	+
うれし	2	A	+
つらし	2	A	-

計374例

表4 形容詞・連体形終止総数順

形式	総数	類型	評価
なし	3	B	
苦し(心苦し)	2	A	-
わづらはし	2	A	-
あぢきなし	1	A	-
あやし	1	A	-
いとほし	1	A	+ -
恐ろし	1	A	-
かたし	1	A	-
かなし	1	A	+ -
心憂し	1	A	-
つ、まし	1	A	+ -
良し	1	A	+
わびし	1	A	+
わりなし	1	A	+

計18例

表5 連体節形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	250	B	
深し	55	C	
はかなし	53	A	-
あやし	46	A	-
かたし	44	A	-
苦し	36	A	-
いみじ	33	B	
近し	28	C	
心やまし	27	A	-
良し	24	A	+
をさなし	24	A	-
かなし	23	A	+ -
若し	23	A	-
かしこし	21	A	+
軽へし	20	A	-
憂し	19	A	-
くちをし	19	A	-
をかし	16	A	+
すきへし	16	A	+ -

形容詞	総数	類型	評価
悪し	14	A	-
かひなし	14	A	-
高し	14	C	
ありがたし	13	A	+
心ほそし	13	A	-
頼もし	12	A	-
つらし	12	A	-
めでたし	12	A	+
わづらはし	12	A	-
疎し	11	A	-
うれし	11	A	+
むつかし	11	A	-
多し	10	C	
やむごとなし	10	A	+
ゆゆし	10	A	-
よろし	10	A	+
いはけなし	9	A	-
かたじけなし	9	A	+
長し	9	C	
見ぐるし	9	A	-
めづらし	9	A	-
重し	8	B	
かたはらいたし	8	A	-
くやし	8	A	-
ことへし	8	A	-
恋し	8	A	+
なつかし	8	A	+
にくし	8	A	-
はかへし	8	B	-
はづかし	8	A	+ -
わろし	8	A	-
うしろやすし	7	A	+
たふとし	7	A	+
ところせし	7	B	
とほし	7	C	
古し	7	C	
あいなし	6	A	-
いとほし	6	A	+ -
おそろし	6	A	-
おほけなし	6	A	-
さかし	6	A	-
しげし	6	B	
親し	6	A	+
涼し	6	B	
たいへし	6	A	-
つゝまし	6	A	+ -
ひがへし	6	A	-
便なし	6	A	-
めざまし	6	A	-
めやすし	6	A	+
らうたし	6	A	-

形容詞	総数	類型	評価
わりなし	6	A	-

計1573例

まず、準体法以外（表3から表5）の用法について、一般に形容詞の出現絶対数はAの感情・評価的形容詞が圧倒的に多い。終止形終止法の場合の形容詞の種類については、表3によるとCの属性的形容詞が現れず、Bの中間的な形容詞が「なし」「遅し」「いみじ」の3種類現れるのみである。しかし絶対数では「なし」が136例で抜きん出て多く、また3種類というバリエーションの少なさも、Bに所属する形容詞の絶対数の少なさを考えると、必ずしも少ないとは言えない。Aの形容詞の評価的意味については「良し」「かしこし」「かたじけなし」「心やすし」「うれし」など、明らかなプラス評価を表すものが現れ、「いとほし」「はづかし」「かなし」など、文脈によりプラス・マイナスのどちらも表すものも複数見られる。

ところが、表4の連体形終止の場合は、Bの「なし」以外はすべてAの感情・評価的形容詞であり、「なし」も抜きん出て多いわけではない。また評価的意味については明らかなプラス評価を表すものは「良し」1例のみであり、どちらも表せるものとして「いとほし」「かなし」「つゝまし」が各1例ある外は、すべてマイナス評価のものである。また、連体形終止法に現れる形容詞の絶対数自体も非常に少ない。

それに対して表5の連体節に現れる形容詞は絶対数が格段に多く、種類もABCのすべての形容詞が現れる。Cのものは「深し」「近し」「高し」「多し」「長し」「とほし」「古し」の6種類で、それぞれまとまった用例数がある。また評価的意味についても、プラス・マイナス両方のものが現れており、明らかなプラス評価を表すものは「良し」「かしこし」「をかし」「ありがたし」「めでたし」「うれし」「やむごとなし」「よろし」「かたじけなし」「恋し」「なつかし」「うしろやすし」「たふとし」「親し」「目やすし」の15種類である。どちらも表せるものとしては「かなし」「すきすきし」「はづかし」「いとほし」「つゝまし」の5種類が現れており、こちらも種類、絶対数ともに多いのが特徴である。

これらと比較して、準体法は用例の絶対数はさほど多くないが、バリエーションとしては、ABCのすべての種類の形容詞が現れ、かつAの形容詞の評価的意味についてプラス・マイナス両方のものが現れている点で、連体法の場合と同様の傾向を示している。特にCの属性的形容詞が「深し」「多し」「高し」「すくなし」「浅し」「薄し」「近し」「長し」「短し」の9種類と3用法の中で最も多い。この点は事柄の概念をまとめ上げて体言化するという準体法の文法的機能と深く関わっていると考えられる。感情・評価などの意味を表す情意的な形容詞は、文の種類としては表出型になりやす

く、対照的に客観的な状態描写を表す属性的な形容詞は、文の中で概念化される準体法の用法に最もなじみやすいからである。

また、動詞節に対する形容詞節の出現率を見てみると、終止形終止法195%（動詞節192例、形容詞節374例）、連体形終止法29%（動詞節62例、形容詞節18例）、連体法113%（動詞節1394例、形容詞節1573例）、準体法56%（動詞節455例、形容詞節255例）となっており、準体法はちょうど連体法と連体形終止法の間隔の様相を示している。

#### 4.1.2 助動詞を含む場合

受け身と自発の（ラ）ル、使役の（サ）スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について、総数が多い順にまとめたのが次の表6（準体法）である。また、土岐（2008）から連体法の場合を表7に、土岐（2005）のデータからまとめ直した終止形終止法と連体形終止法の場合を表8、表9に示す。終止形終止法と連体形終止法の場合については終止連体異形の活用形を持つ助動詞に限り、かつ、ナム係り結びとゾ係り結びも併せて文末の終止法に6例以上現れるもののみを取り上げているため、合計数は実数ではない。

助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

ナリの場合、終止・連体同形の活用語につくナリは対象から除外した。以下に示した終止ナリと連体ナリは終止・連体異形の活用語につくものである。また、非活用語につくナリを以下では体言ナリとしてある。

また、準体法と連体法について助動詞自体の活用が終止・連体同形のもののは網掛けで示してある。

表6 準体法

形式	総数
ム	379
キ	331
ズ	127
ケリ	109
メリ	94
タリ	93
ツ	79
ベシ	77
リ	64
体言ナリ	54
ヌ	43
連体ナリ	23
マジ	20
ケム	12

形式	総数
ラム	11
ラル	10
ル	9
終止ナリ	8
マホシ	8
ジ	5
ス	4
マシ	3
サス	2
シム	1
ムトス	1
計	1567

表7 連体法

形式	総数
ズ	557
キ	433
ベシ	431
ム	414
体言ナリ	407
タリ	345
リ	193
ケリ	178
マジ	113
ツ	97
ヌ	56
メリ	41
ケム	35
ラム	28
マホシ	17
終止ナリ	12
ル	12
ラル	10
マシ	4
ス	4
ジ	2
サス	1
連体ナリ	1
計	3391

表8 終止形終止法

形式	総数
体言ナリ	597
ズ	502
ケリ	280
メリ	262
ベシ	209
キ	203
連体ナリ	174
ヌ	167

形式	総数
タリ	106
リ	52
ツ	48
マジ	36
終止ナリ	22
ムトス (ムズ)	19
ジトス	5
ラル	3
マホシ	2
計	2687

表9 連体形終止法

形式	総数
キ	75
ケリ	57
ツ	54
ベシ	23
メリ	22
ズ	19
タリ	19
リ	19
ヌ	13
ラル	5
ムトス (ムズ)	4
終止ナリ	3
マジ	2
マホシ	1
ル	1
計	317

まず、表8の終止形終止法の特徴について述べる。最も多いのは体言ナリ（いわゆる形容動詞も含む）であり、事態の叙述及び断定の形式である。次に体言ナリよりはやや少ないものの、同様に多いのが否定のズであり、この2語で各々500例以上の用例があるため、助動詞計2687例のうち、おおよそ半数弱をこの2語で占る。次に200例以上の助動詞として、過去のケリとキ、根拠に基づく推量のメリとベシが現れているが、過去系の助動詞と推量系の助動詞との間に明確な序列は認められず、入り交じる形で分布している。その次に100例以上の助動詞として、断定の連体ナリ、完了・存続のヌ、タリが位置し、リ、ツ、マジ、終止ナリと続く。すなわち多い順に、1叙述（断定）と否定、2過去と根拠に基づく推量、3断定、4完了・存続、となっている。

次に表9の連体形終止法についてであるが、キ、ケリ、ツという過去と完了の助動詞が上位に位置し、この上位3語で助動詞計317例の半数以上を占める。その次に絶対数としては各々これらの助動詞の半数以下のベシ、メリという根拠に基づく推量の助動詞が現れ、過去系の助動詞と推量系の助動詞には過去系のほうが

上位であるという序列が認められる。次に推量系の助動詞よりはやや少ないものの、ほぼ同様の用例数で否定のズと完了・存続のタリ、リが現れ、ヌ、ラルへと続く。すなわち、1過去と完了、2推量、3否定と完了・存続、という序列になっている。

以上と比較しつつ、表6の準体法と表7の連体法について見ると、全体に準体法と連体法はよく似通った分布をしているが、いくつか相違点も認められる。まず準体法では、ムなどの終止・連体同形活用の助動詞を除いて、過去のキが最も多い点で連体形終止法に類似している。次におおよそ3分の1強の用例数で否定のズが続く。それに対して、連体法では、キとズの順位が逆転しており、否定のズが最も多い点で終止形終止法の特徴に類似している。しかし、両者とも過去・完了系の助動詞と推量系の助動詞との間に明確な序列は認められない。終止・連体異形活用の推量の助動詞では、連体法ではとりわけベシが目立って多く、メリはベシの10分の1以下しか見られないのに対し、準体法ではメリが推量系の助動詞の中で最も多く、ベシはメリには及ばないという点が挙げられる。

以上の分析を総合して、4つの用法（終止形終止法、連体形終止法、準体法、連体法）相互の関係を考察すると、終止形終止法と連体法は、体言ナリとズが上位にくること、過去系と推量系で序列がないことの2点において基本的に近い分布をなしており、準体法は体言ナリやズが下がってキが最上位にくる点で、連体法から連体形終止法への中間的傾向を示しているものの、過去系と推量系の助動詞の明確な序列は認められない点で、連体形終止法より連体法に近い傾向をも併せ持っていると言えよう。

## 5. おわりに

本稿での考察結果を以下にまとめる。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプについて、準体法は、接続助詞の用法を持つ助詞「を」後接の準体法と助詞「に」後接の準体法のケースを介して、通常の連体法や助詞「は」「も」などが後接する準体法から、連体形終止法へと連続的に分布している。
2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の意味類型について、準体法はABCのすべての類型が現れ、かつAの形容詞の評価的意味についてプラス・マイナス両方のものが現れている点で連体法と同様の傾向を示している。また、動詞節に対する形容詞節の出現率では、準体法はちょうど連体法と連体形終止法の中間的様相を示している。
3. 助動詞を含む準体句の場合、終止形終止法と連体法は、体言ナリとズが上位にくること、過去系と



推量系で序列がないことの2点において基本的に近い分布をなしており、準体法は体言ナリヤズが下がってキが最上位にくる点で、連体法から連体形終止法への中間的傾向を示しているものの、過去系と推量系の助動詞の明確な序列は認められない点で、連体形終止法より連体法に近い傾向も併せ持っている。

以上により、3点のほぼすべてにわたって、『源氏物語』における準体法は、連体法と終止法の中間的な様相を示すことが明らかになった。

## 注

吉田(1995)によると、  
せばし、たかし、ちかし、とほし、ふかし、みじかし、ひろし、ほそし、ちひさし  
が例示されている。

## 主要参考文献

- 尾上圭介(1982)「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』明治書院1-19  
同(2001)『文法と意味I』くろしお出版  
小池清治(1967)「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学 言語と文芸』54、12-21  
近藤泰弘(1986)「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2、22-30  
同(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房  
同(2001)「名詞節と項構造」『日本語文法』1-1、41-52  
信太知子(1970)「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82、29-41  
同(1987)『「天草本平家物語」における連体形準体法について—「覚一本」との比較を中心に消滅過程の検討など—』『近代語研究』7、121-139、武蔵野書院  
同(1996)「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』7、172-189  
同(2006)「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—句構造の観点から—」『神女大國文』17、29-44  
土岐留美江(2005)「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4、16-31  
同(2008)「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』57、55-62  
同(2009)「平安和文会話文における準体句—助詞が後接しない場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』58、31-39  
同(2010)「平安和文会話文における準体句—助詞「が」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』59、15-23  
同(2011)「平安和文会話文における準体句—助詞「を」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』60、(23-33)  
同(2012)「平安和文会話文における準体句—助詞「に」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学

- 編)』61、(1-9)  
同(2013)「平安和文会話文における準体句—助詞「は」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』62、(19-26)  
同(2014)「平安和文会話文における準体句—助詞「も」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』63、(35-42)  
同(2015)「平安和文会話文における準体句—係助詞「こそ」「なむ」「ぞ」「や」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』64、(29-36)  
同(2016)「平安和文会話文における準体句—「が、を、に及び係助詞」以外の助詞後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』65、(51-59)  
山内洋一郎(1959)「院政期の連体形終止」『国文学攷』21、240-250、広島大学国語国文学会  
同(1963)「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30、33-41、広島大学国語国文学会  
同(1964)「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』23-3、125-152  
同(1970)「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」『国文学攷』54、55-58、広島大学国語国文学会  
同(1992)「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44、和泉書院  
同(1997)「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」『文教国文学』37、1-8  
同(2003)『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版  
吉田光浩(1995)「平安期形容詞の意味と終止用法について—「枕草子」『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』112-145、明治書院

(2016年8月1日受理)